

無文字社会を読む

あるいは声の征服

中村雄祐

1

新しいカセットテープをとりだし、ロールの状態を調べる。それから録音機、マイクのバッテリー残量を確認する。パマコの露店で売っているカセットテープは長い間台の上で日晒しになっているために、たまに使いものにならないものが紛れ込んでいる。見た目がよくてもちゃんと録音されているかはやってみないとわからない。直射日光の当たらない、風の当たらない、埃の少ない位置を捜し、語り部のママドゥに座ってもらう位置に真座を敷き、その前に録音機を置く。ヘッドフォンをつけてマイクに向かって自分で「ああ」とか「いい」とか声を出して、録音レベルを調節する。この頃にはすでににごとかと集まってきた人たちが垣をつくっており、子供たちは声を張り上げて踊ったり、取っ組み合いの喧嘩を始めたりにしている。「しろんぼやーい、しゃしんとってちようだいよお」助手のパパはもう見慣れた録音の準備がちゃんと進んでいるか横目で見ながら、集まってきた中の顔見知りと挨拶したり、足元でじゃれ合っている子供たちを怒鳴りつけたりしている。これではいつ邪魔が入るかかわからない。私はパパを呼ぶ。「パパ、やっぱり小屋の中にして。暑いけど仕方がない」語り部の家の者たちと話し合って、結局、関係者のみが集まった小屋の中で録音が行なわれることになる。「この前はどこまで話したかの」「ナレ・マガン・ケニンの二人の妻が

男の子を生んだところまで」ママドゥはうなずくと、録音マイクを前に、はるか昔マンデの英雄たちの栄枯盛衰の物語の続きを語り始める。人の前だろうと、録音機の前だろうと、彼はつねに、喉が裂けるのでは、ときいていて恐くなるような大音声で語る。私はヘッドフォンで録音をモニターしたり、時々ノートをとったりしながら、彼の言葉をきく。テープが終わりそうになり、私は合図を送る。語りがやむ。私はテープを再生し、「よくとれてるよ」といいながら彼にヘッドフォンを渡す。彼は先ほどの自分の声をきく。脇ではパパがこの小さな録音機がどんなにすごいかを皆に話している。「ほんと、まるで本物。市場で売ってるラジカセとは全然違うんだから」。語り部はなにもいわず、黙ってヘッドフォンを横に座っている家の者に渡す。皆一とおりの順番に録音をきく。ヘッドフォンを手で押えてじっと録音をきき、ちょっと困ったようなやれやれといった顔で隣にまわす。戻ってきたヘッドフォンをしまいながら私は誰にともなくいう。「うん、それであとは、これを本にするわけか」。

2

1988年から90年、無文字社会の代名詞、あるいは無文字大陸と呼んでもいいかもしれない黒アフリカの一国、マリ共和国での私の歴史語りの調査はこんな風に進められていた。

そしてある日、私はマリ共和国人文科学研究所

で文部省が採用したバンバラ語のアルファベット表記のしかたについて所員たちと話していた。マンデの語り部の録音のテープ起こしというただでさえ単調、地味な作業を続けていた私は、せいぜい50キロ四方内のあちこちから集めた口頭伝承の言葉がそれぞれ微妙に異なることにいい加減頭に来ており、ちょっと八つ当たり気味に彼らに議論をふっかけていた(注：バンバラ語はマンデ系言語の一つ)。するとたまりかねたように一人の言語学者がいった。

「君はどうしてわれわれの言葉だとそんなに表記の対応にこだわるんだ?」。

彼は、英語のrecordという単語の動詞と名詞での発音の違い、仏語のélevageという単語のlのあとのeをパリの人間やそれにつられるスノッブなアフリカ人(彼は大統領のラジオ演説の発音を引き合いに出した)はほとんど発音しないことをあげて、あくまでも発音と文字の対応関係に固執する私をたしなめた。

識字率の上昇を悲願とした無文字言語のアルファベット化の努力は音声言語情報をいかに正確に文字に移しかえるか、という目的に向けられている。その点からいうと私の指摘も少なくとも議論の対象としてはまったく無意味なものではなかったと思うが、無文字言語はこれだから困るなどと愚痴りながらテープ起こしをしているうちに、私はいつのまにか文字と音声の間には完全なる調和があると勝手に思いこんでいたようである。

無文字社会ゆえの口頭伝承、といいながら、実際には私の言語は文字からまったく自由になれない。私のバンバラ語体験はまずフランス語の書物のアルファベット表記から、声を消された図像から、始まった。そして実際にその言葉を声に出す人間に出会っても、私はまずその声をノートをとることに気を配り、発音の正確さは表記の正しさ

の準拠枠として確認される。正しく表記できれば、まずは大丈夫。語り部たちの膨大な録音も、やがて適当なアルファベットでもって文字化される日を待ながら棚に並べられている。録画、録音という新しい媒体の登場は、知識・知性のあり方にまた新しい変化を加えつつあるが、口頭伝承に関していえば、録音技術の発達によって、文字は声に対する決定的優位性を獲得している。かつてはその豊饒性、躍動性のゆえに書くのが追いつかなかった語りも、今では録音された後、解剖するように綿密に分析され文字化され、そしていつか本になる。一方、バンバラ語による出版はマリ政府、民間の両方で進められているが(週刊誌、マリの歴史や諺の本、それから『星の王子様』の翻訳など)、フランス語による出版さえままならぬという現在の経済状況では、紙の上のバンバラ語は一般の人々、特に首都以外の大多数の国民にはまだまだ縁遠い存在である。

結局、延べ2年半を費やして覚えた私のバンバラ語は徹頭徹尾、文字言語である。しかもそれがほとんどの場合、手紙、書き置きといった日常的な用途のためではなく、書物というかたちで出版されることを想定しているのであれば、より正確には印刷文字言語(を念頭に置いた下書き)であり、その言葉はともに暮らした人々のほとんど誰にも共有されてはいない。

3

アラブ世界と古くから交渉のあったマンデの人々のイスラム名は声の文字からの自由さを感じさせる。本来アラビア語で文字との対応関係があったはずの人名がするすると文字の網目をすり抜けるように響きを変えていく。カタカナという網ですくってみても、ムハマトゥという名前は、ママトゥ、マードゥ、マドゥ、イブラヒムはイブライム、

イブレイマ、ピラマ、ブラマ、ブレイマ、ファトゥマタは、ファンタ、ファティム、ファティン……。はたして文字の側からの拘束があったら、こんな風になるだろうか。アラビア語の知識をまったく持たない私にとって、名高い予言者の名前は「マホメット」という日本語の表音文字によって与えられた枠からはずれそうもない。現在マリのイブラヒムたちもまた、アルファベットという枠によって、Ibrahim, Birama, Brama, Bréhimaなどなど、身分証明書上は(表記の?)異なる名前としてそれぞれに固定しているが、それは彼らにとってたいした問題ではなさそうである。

4

J・グディも指摘するように、文字を持つことによって口頭言語もまた文字からの影響を受ける。個人のレベルでも、文字言語を書き記すことをその職業とする研究者の場合、文字言語と口頭言語との間のフィードバックは特に顕著であると思われる。書くように話し、話すように書く。文化人類学のフィールドワークの恐らく唯一の文句のない方法である参与観察とは、具体的にはメモをとりながら暮らすことにほかならない。写真機、録音機を持たずにフィールドに向かうことは、その禁欲のゆえに賞賛されることはあるが、筆記用具なしの長期滞在は試みられることすらほとんどないのではないだろうか。

異文化理解という公認のキャッチフレーズからいえば、文字を持たない言語は文字を持たないかたちで修得されるべきだ、という主張も一応は可能なはずであるが、そうした試みの実現の困難さはちょっと想像してみただけでもわかる(ただしその可能性が排除されているわけではない)。それほどに、研究という営みは文字を読み、書き、出版する行為と抜き差しがたくかかわり合っている。異

文化をテキストと見立てて読む、といういい方は一種、こうした事態への開き直りととれなくもない。

アラブ世界と密接な関係を保ち続けてきたマンデ社会は、文字の存在を知らないわけではなかったが、それを本格的に取り入れることはほとんどなかった。バンバラ語の動詞kalanは「学ぶ」こと、「読む」ことの両方を意味する。いわく、バンバラ語をkalan, 楽器の弾き方をkalan, コーランをkalan。このことはコーランの聖句を書いた布や紙がその名もsɛ bɛ n「書」というお守りとして用いられてきたこととともに、知性の革新が文字を読む行為と深い関わりを持つという信念、文字への畏敬の念の表明ととることもできるが、それは同時に、ただひたすら読むこと、文字によって開かれる世界に遊ぶことの快樂を知らないこととし、ともとれる。

文字によって言葉が獲得した発話の文脈からの自由の効果の絶大さはいうまでもない。文字を書き、読むことが私たちに与える可能性自体はつねに開かれている。しかし、大量出版印刷文化が発達した今日、私たちの社会ではただひたすら読むという快樂のみが肥大し、情報摂取という大量消費行動の一形態へと奇妙に変質しつつある。情報相手ならば人は皆寛容な文化相対主義者になれる。そこでは何だって起こりうる(起こってよい、起こってほしい)。そして録音、録画といったより感覚的な新しい媒体は文字情報により現実らしい装いを与える。「いながらにして満喫する秘境の驚異!」。大量情報消費社会の現実情報は情報とのますます速度を増すフィードバックからつくられる。フィールドで文化を読むといういい方は、私たちと彼らの手によってテキストが生成する瞬間の歪み、軋みを自覚しない限り、どこにでもあらわれる観光客、ディスプレイの前の視聴者とたいした違いはなく

なる。

5

マンデの語り部は、マンデ学と呼び得るほどの歴史的深み、地域的広がりを持つ西アフリカ文化の比類ない成果である。一般自由民より一段身分の卑しい内婚世襲特殊職能民に位置づけられ、マキアヴェリの、時に反社会的とさえいわれることもある彼らの振る舞いは、声に出すことによるのみ現前する無文字社会における知識の本性の一面を如実に示している。すべてが媒体のうえの情報として等価となりつつある現在、無文字社会の語り部は、容易に媒体に押し込められることをよしとしない文化の最後の担い手である。居丈高、強欲、恥知らず、嘘つきという風評を文字どおり実践してみせるマンデの知識人の前では、私たちが尊び、信じて疑うことのない無邪気な(あるいは節操のない)「知的好奇心」もたちまち色あせる。彼らは饒舌と寡黙を同時に実現する。

言語の口頭性を極限までつきつめたマンデの語り部と、ノート、録音機を携えた印刷文字文化の権化のような調査者。彼らと私の出会いは、現在ますます困難になりつつある言葉の真の意味での異文化接触のひとつである。しかし、彼らもまた、印刷文字文化と手を取りあってともに進んできた貨幣経済にすっかり包囲されている。光輝く黄金やはるばるメッカ伝来の宝物に囲まれた王も、数珠繋ぎの奴隷を引き連れて銃声も勇ましく凱旋する武将も、語り部とその言葉を残して皆とっくの昔にいなくなってしまった。大航海時代以前の黄金境から一転して奴隷供給地、植民地、後発発展

途上国、とつねにその時代の世界の最低ランクを耐えてきたマンデの人々は、文化大はやりの現在も、時代錯誤的な伝統主義者が世界経済のプロレタリアートか、という不毛な二者択一を前に苦戦を強いられている。豊かな国であれば民族文化の誇りとして国家によって手厚く保護されたであろうこれらの人間国宝の口を現在開かせることができるのは、調査費を持ってやってくる私たち「白人」研究者ばかりなのである。贈り物、謝礼金、情報料、語りの代金……。さもなくば声は発せられることもなく、いずれその主とともにあとかたもなく消え去っていく。

これもまた、大航海時代以来数限りなく繰り返されてきた発見と征服の歴史の最後のエピソードのひとつにすぎないのだろうか。

6

墓蔭に座って一心にペンを走らせている私にマドゥが横から声をかける。「書いたか」。今は自由民として暮らしている者たちの奴隷身分という忌まわしい過去。「書いたか」。コラの実の商売で羽振りのよい男のモール人との私生児という暗い過去。「書いたか」。これは絶対に録音するわけにはいかない、という彼の意向に従い、少しずつノートに書いていく。「書いたか」「うん」「書いたら終わりだ」「どうして」「どうしてって、お前が書いたらもうわしの仕事は終わりだ」そういいながら立ち上がると、彼は自分の小屋へ入っていく。どうして？ 何が終わって、そして何が始まるのか。本当は、この問いに答えるのは私の役目である。

(なかむら・ゆうすけ/東京大学)